

2. 昭和の大津波を忘れない～『津浪と村』山口弥一郎著、『三陸海岸大津波』吉村昭著を読む～

日時：2023年2月11日16:00～17:45
*終了後、最大18:30を目途に自由参加の意見交換

会場：Zoom

対象図書：

- ①『津浪と村』山口弥一郎著、石井正巳・川島秀一(編)復刻版、三弥井書店、2011年
- ②『三陸海岸大津波』吉村昭著、中公文庫、1984年(文春文庫版、2004年)(初版『海の壁三陸沿岸大津波』、中央公論社、1970年)

発表者：①山崎憲治氏 ②田中成行氏

朗読：熊本早苗氏

趣旨：2023年3月は昭和三陸大津波から90年、東日本大震災から12年になる。昭和の大津波で問われた課題が再び平成の大津波でも繰り返されたと思えることは少なくない。過去を未来につなぐ仕事は、繰り返し確認することで地域に定着する。今一度、昭和の大津波を問い返す中から、災害文化の持つ可能性を広げたい。今回は、感情を共有し思考を深めるものとして活字に着目し、読書会形式を取り入れた。

二つの災害をつなぐものとして選んだ二冊の本は、どちらも東日本大震災前に発行されているが、『津浪と村』は東日本大震災の発生を受けて復刻版が出され、『三陸海岸大津波』は3.11以降、さらに多くの全国の人々が手に取っている。

発表者はキーストーンとなる文章を2～3か所に絞って問題提起する。同箇所の記事には朗読を取り入れた。

2.1 『津浪と村』～発表者：山崎憲治


昭和8年(1933年)の大津波の際は、津波のメカニズムも分かっていない時代で、津波へ対応できない状況があった。平成23年(2011年)には、津波についての知識が増加し、警報のシステムもあった。しかし、多くの犠牲を生んだ。なぜ

か、ヒントを求めて、山口弥一郎とともに昭和の大津波をもう一度振り返る。

著者紹介：高校教師。夏・冬の休みを利用し、リュックを背負い、村から村へと歩き、時に船に乗り、数年かけて気仙沼から田野畑の沿岸部を調査。現地を徹底して歩くことが山口弥一郎の研究

方法。(S-1)

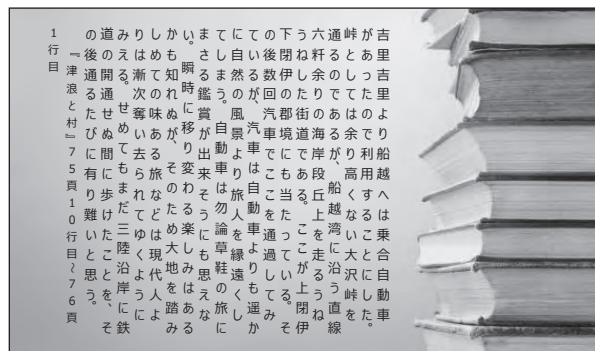
山口の研究方法 現地を徹底して歩く



山口弥一郎(1902～2000)
『津波と村』は1943年に柳田国男にすすめられて出版
被災した村を調査できるのは、夏・冬の長期休み
1935年 冬 気仙沼から北へ田老
1936年 夏 牡鹿から気仙沼
1936年 冬 下北半島の尻屋崎から種市、田野畑
1940年 夏 大船渡から田老、小本
1942年 夏 譜代、田野畑
被災後の集落の在り方を
高地へ集団移動、分散移動、現地居住
漁業の生産活動では海に近づくことが不可欠
生活・津波以前のものとの生活に戻る動き
津波危険地へ納屋から本屋へ再建する

その実際が75頁でわかる。(S-2)(朗読)

スライド2(S-2)



1行目 道のりかまてにての下六通峠が吉
津浪と村 後開るしめいさる自然閉ね料るとあり
通る漸はめも知るとまの回数たりてた里
浪の漸はめも知るとまの回数たりてた里
と通る漸はめも知るとまの回数たりてた里
村の通る漸はめも知るとまの回数たりてた里
75頁 間にせめてもまた三陸沿岸に鉄
10頁 間にせめてもまた三陸沿岸に鉄
10頁 間にせめてもまた三陸沿岸に鉄
76頁 間にせめてもまた三陸沿岸に鉄

山口氏は300以上の論文を書き、博士号を授与されている。地形を足で知る、様々な人々に話を聞き、現地に学ぶ、という手法は柳田国男の手法に学んだものであり、この本も柳田国男に勧められて執筆。リアリティとは何かということを教えてくれる。

山口氏は歩く中で、昭和の大津波以前に高台移転があったことに気づき、高台移転を課題と考えた。2011年後の地図も加えて、高台移転についての山口の考えを整理してみる。①山ノ内集落には、明治以前から高台に集落がある^{えんのぎょうじゃ}。役行者の言い伝えがあり、人の海岸沿いに下りていこうとする傾向を抑えた。(S-3) ②船越もリーダーの存在により高台移転を実現した例で、2011年の大津波で浸水を免れているのが真ん中の図でわかる。

右の吉浜の地図では、神社が集落の下辺にある。漁村の神社は、港に入る漁船の目当てとなるべく高台にあるのが通例であるから、集落が神社より上の高台に移転したことを示している。(S4) ③綾里と唐丹の地図からは、昭和の大津波後高台移転をし、平成では港は浸水したが集落は浸水を免れたことが分かる。(S-5) ④本郷の地図では、移転を成功させるヒントとして道路等社会インフラの整備があることがわかる。地図右上の花露辺集落はもともと高台にある。アイヌ民族の自然観によるものと推定される。(S-6) ⑤吉里吉里を山口氏は高台移転の「理想形」とした。住宅だけでなくコミュニティ活動を活発にする種々の施設が建設されている。昭和の大津波より10年前に発生した関東大震災後の復興アパート（江戸川・代官山等）に類似している。しかし、弱点は地図上のブルーライン（昭和の大津波浸水線）内での建設であったことにあり、2011年には被災した。ここには限界が見られたが、生産と生活の場を一体として作るという優れた発想があったこと忘れてはならない。(S-7) *補足有

スライド3 (S-3)

明治三陸大津波（1896年）以前から高地に集落を構えていた例

- 役の行者の教えを守ったむらと伝えられ・・・山ノ内集落

スライド4 (S-4)

明治三陸大津波（1896年）の被災後に高地へ集落移動した例

- 船越

吉浜

新山神社：通常漁村の神社は集落の高いところに立地ここでは神社の上手に集落あり。低地部にあった集落が移転したため。

スライド5 (S-5)

1933年津波後集落移動をし、2011年には被害を回避した 綾里の一部、唐丹の一部、本郷

スライド6 (S-6)

本郷

明治の大津波後、集落高地移転を4戸で行ったが漁業に不便で、元の低地の住居にもどる。昭和の大津波で壊滅打撃。101戸内100戸被災、620名うち208名犠牲。そこで、再度集落の高地移転を進める。リーダーの活躍。まず、移転地の確保。次いで集落の集団移動には新集落へのアクセス道路が不可欠。水道も必要。これらの社会インフラをどう作るか。

1933年津波後の移動集落は道路を通して、その道路沿いに（あるいは上手に）階段状に住居が並ぶ。花露辺（ケロベ）は本郷より以前から村があったのだから。津波を避けるように高地に住居が散在するむら。

スライド7 (S-7)

1933年津波後、集落移動を行いそれは「理想形」と評価されたが、2011年被災

- 吉里吉里・組合を作り、道路、水道、浴場、診療所、消防屯所、託児所、青年道場（これら施設は関東大震災後の復興アパートに類する）

S-8の左の写真は被害が甚大であった田老湾。右は田老高等尋常小学校。震災後、この学校の教員により『田老村津浪誌』という大変貴重な記録誌が編纂されている。次の発表の牧野アイさん達への作文指導もこの学校で実施された。

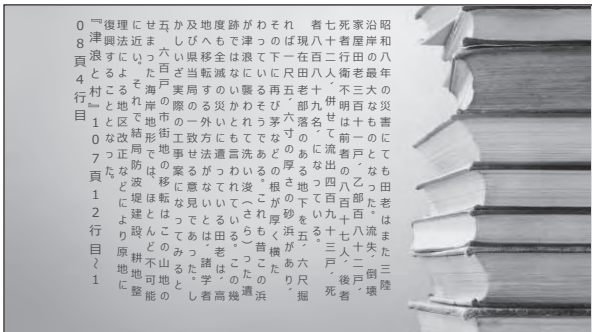
スライド8 (S-8)

田老という村が幾たびの被災を経て、それを克服する歴史を作ろうとしているか

- 朗読

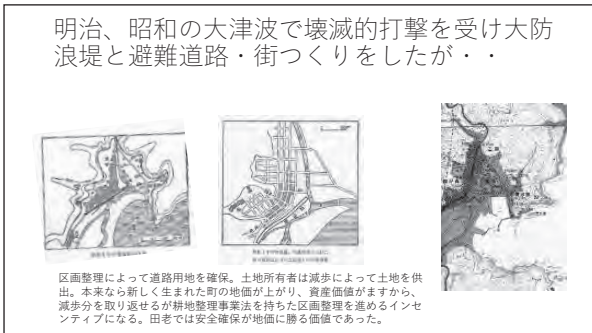
山口氏の田老についての記録の pp.107-108 (S-9, 朗読)によると、地形と大規模な集落であったため高台移転を断念し、長大な防潮堤（田老では「防浪堤」と呼ぶ）建設を開始したことが分かる。

スライド9 (S-9)



地図から山に真っ直ぐに向かう道路整備が見える。(S-10) 区画整理法は当時なかったが、耕地整理事業法を活用して、安全確保が図られた。右の地図は 2011 年の大津波浸水区域であり、昭和の大津波後に安全に向けて整理された地区が大きく浸水したことが分かる。しかし、この防浪堤は、第一波を止め、6分間の逃げる時間を確保しており（堺、2011）、昭和の大津波後の安全確保の一例と言える。

スライド10 (S-10)



上記例は、昭和の大津波で比較的被害が軽かった地区であるが、2011年には甚大な被害を受けている。このことは、コミュニティごとの高台移転の可能性の追及と避難を有効にするための絶えざる災害学習の必要性を示している。

スライド11 (S-11)

昭和の大津波では被災が比較的軽かった地区しかし、平成の大津波では壊滅的打撃

- 陸前高田・・・松原が防潮林の役割を果たした
- 鶴住居・・・砂浜とその内側にある潟が被害を防ぐ
鶴住居本村は144戸のうち7戸罹災9名
- 大槌・・・安渡、吉里吉里の被災に比較して中心部大槌の家屋流失割合は少なかった

質問：気候変動により海面上昇がみられる層高台移転が必要なのではないか。

回答：高い所に住む場所を確保しにくい現状もある。財産には保険をかけられる。命を守る避難が最大の課題。避難ルートの検討、弱者の安全確保等、何としても命を守ることが課題。

発表者からの補足：

山ノ内集落が明示の津波以前から高所に集落を立地させていた点、「役の行者が示唆した」と今村明恒博士が「津波漫談、役小角と津波除け」で説いたと山口弥一郎は記している。漁業者にとり海近くに住居を構えることは、魚影を見てすぐに出漁でき、生業を維持するうえで肝心な条件になったはず。これを規制するには、役の行者を登場させ「掟」化が必要だったと思われる。

アイヌに起源をもつであろう花露辺（カロベ）の高台に広がる住居は、アイヌの自然観から生まれているのかもしれない。「和人の高台移転」とは違う視点で捉え直すことができるのではないかと問題提起につながる。

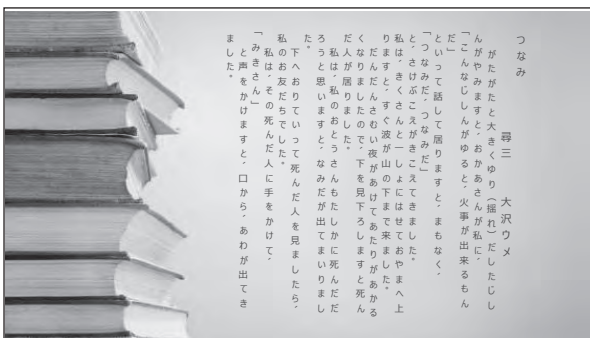
吉里吉里の高台移転を山口が理想形と評価したのは、関東大震災の復興においてつくられた同潤会アパート（江戸川、代官山、神宮、大久保）が各地域の特色をもって居住空間としてだけでなく新しい生活空間、コミュニティを用意するモデルであり、その根底に大正デモクラシーの発想があり、それに類似したコンセプトが吉里吉里に見られたからではないかと思われる。高台移転に留まらず、漁業集落の新しいコミュニティを目指していたのではと考えると、当時の復興住宅建設が持っていた可能性につながる。今後の検討課題である。

2.2 『三陸海岸大津波』～発表者：田中成行

著者の吉村昭氏は何度も三陸沿岸を訪問し、地元の人との対話が豊かであるところ、山口弥一郎氏と共通している。吉村氏の目に留まり『三陸海岸大津波』におさめられている田老尋常小学校の子ども達の作文の中から、3年生と6年生の2人の作文を紹介する。大津波による災害の現象面の記録とは異なる視点を見ることができる。

スライド1 (S-1) :

3年生の大沢ウメさんの作文 (朗読)



ウメさんの作文 (S-1) は、私自身の個人的な体験と重なり、家族の死とどう向き合うかということの理解を深めさせてくれた。家族を亡くした人の心にどう寄り添うかということは難しいが、震災で家族を失うとはどういうことか、吉村氏の20年間の対話から感じられる。

スライド2 (S-2) :

牧野アイさんの作文 1 (朗読)

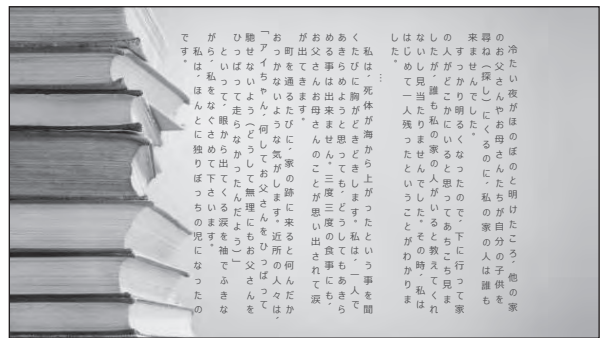


明治の大津波を経験したはずのアイさんのおじいさんが「なあに、起きなくてもいい」と言う。実はこの後おじいさんは逃げ遅れて亡くなる。このことは、過去の体験や特に古老の語る教訓の大事さとともに、それを前提としながらも、それを超えることもあることをどう対応に含めるかとい

う難しさと大切さを示している。

スライド3 (S-3) :

牧野アイさんの作文 2 (朗読)



S-3は作文の最後の部分(一部省略)であるが最後の「私は、ほんとに独りぼっちの児になったのです」とその二つ前の段落の最後の「私ははじめて一人残ったということがわかりました」の対比は筆者の文章のうまさ表れている部分であり、その間が重要。(省略部分の)他の泣いている人を慰める自分も泣いたこと、近所の人の慰めの場面では両者ともに涙していることから、共有体験の重さが浮かび上がる。この文章を書くことにより、アイさんが「独りぼっちの児」ではなくなると理解した。震災後の支援活動等で、支援される側と支援する側のギャップを感じる事例が少なくないことを理解するのに、この共有体験と支え合う人の心のつながりや学校教育における教師の信頼などが鍵と考えられる。だからこそ被災という共通体験を持たない私には、「作文」は重要であった。

吉村氏はその10年前の関東大震災も描いている。酷な事象も厳しい表現で取り上げているが、丁寧で温かな眼差しを感じる作家である。

補足1：佐々木力也さんから

アイさんの担任の佐々木耕助先生は、田老小学校が初任校。震災後も被災した子ども達との間に手紙のやり取りや送金もあったと聞く。『田老村津浪誌』の編集後記に中心的に参加したことが記されている。震災後、大船渡に異動。気仙郡陸上公式審判員を務め、2001年、90歳で死去。

補足2：川守田進さんから

「何して・・・」という近所の人のことばは、声をかけた人も悔しく悲しい思いであったらう

と思われる。アイさんと同じ思いということから慰めとしてこの表現が用いられたと思う。近所の人も家族を亡くしていたかもしれない。

2.3 総括コメント～大野眞男

本日は二つのテーマがあった。①高台移転：漁業を生業とする人と海の関係から②大量死をどう乗り越えるか。

「よだ」という津波の方言語形があるのは三陸のみ。山口弥一郎の師柳田国男は、明治の大津波の後『雪国の春』において、高台に移転した者は後悔し、海に近づいた者は漁業にも商売にも便宜を得ている、と書いている。『津浪と村』は柳田のそのコメントに対する山口の答として書かれたのではないだろうか。

唐丹も高台に移転したが、もとに戻った。三陸には春先山火事が多いためである。3.11 後、生業を中心に据えた復興とそれより嵩上げを中心にした復興があるが、生業と高台移転は、一面的には言い難い問題である。

「命でんでんこ」という三陸地方のことばがある。両石では、最初の30分は家族を助け、残りの30分では自分が助かるように、と言い伝えられている。理由は「人だね」を残すためと。多くの人々の死をのりこえ、次の世代に残そうとされた。外からも人材を積極的に求めている。

山口弥一郎さんの『津浪と村』で特に印象に残ったことに、「家の再興」が独立した項となって論じられていることである。『田老村津浪誌』や「郷土教育資料」を見ると、震災後間もなく人口も生業も回復している。これに対して、3.11 後は、復興がインフラに偏り、生業支援が十分であったか、もともと過疎が問題であった地の人材流出を止めているかという問題を二人の著作は私達に問い詰めている。どう乗り越えることができるか、ことば・自然観・生業・家等々を巡って、人の心の底流にあるものを新たに発見し、応援することが、災害文化研究の課題としてある。

2.4 閉会のことば～熊本早苗

これまで解けなかった謎が、今日、現場から

学ぶ、現場の声を聞く、現場に寄り添うことの各立場での実際を知ること、二つの災害がつながり、心が見えて、解けてきた。災害文化からのアプローチの可能性と課題も見えてきた。参加者および発表者に感謝申し上げる。

2.5 感想から

＜特に印象に残ったところ＞

- 丁寧聞くことの大切さを改めて思いました。山口さんがまさに歩いて回ったこと、肝に銘じるべきだと思いました。
- 岩手でも進められているジオパークへの関心の中心は地理・地質にあるのかもしれませんが地震・津波も地理・地質と密接に関連しますので、山口氏や吉村氏の著作は三陸ジオパーク構想の中で学習材として有効に活用できるのではないかと思いました。明治の津波に関しては明治29年『風俗画報』臨時増刊もあり、復刻『大海嘯被害録』として遠野文化研究センターから出されています。
- 今と違って内陸が沿岸への交通のハブとなっておらず、海沿いに岬を回ったり峠を越えたりする旅は大変だったろうと思いました。教訓にあふれたこれらの書籍が埋もれてしまわないように、もっと防災教育の中で活用することが出来ないでしょうか。
- 書籍を通じた研究会の開催は、とても良かったと感じています。朗読や書評、総括コメントなどを織り込んだ研究会をもっと開催してほしいと思います。朗読、書評、最後のコメントまで、とても質の高いものを聞かせていただきました。山口弥一郎先生の『津波と村』の日本語の素晴らしさに魅せられました。
- 山口・吉村両氏は、震災の客観的なデータや哀話を収集し書籍にされただけではなく、震災の裏に潜んでいる「人間の生き方」「人間の問題」を常に意識され、人はどう生きていくべきなのかを問題提起しているように感じます。
- 山口弥一郎氏と吉村昭氏の調査過程で、二人がリュックを背負い沿岸部を歩き丹念に時間をかけて聞き取りをしたことに感銘を受けました。

調査をする者はよそ者で、同じ経験を共有する相手ではありません。三陸沿岸に住み被災した人たちが心を開かなくても当然です。一言で「聞き取り」と言っても、困難な経験をした人たちがその経験や心情を語ってくれるほどになるには、彼らから信頼と安心を得て伝えたい気持ちを育む時間が必要で、その人間的な営みに何度も足を運んだからに違いないからです。

○縄文人の住居立地が話題になりましたが、海面標高が高かったその時代にはリアス海岸の入り江が奥深くまであり縄文人は舟をよく操り交易したようです。海洋国家でもあった縄文時代のこの国は、防災の工夫をしつつ、積極的に海に出て行く勇敢で頑強な精神を持つ人たちの国であったと思います、今後の考古学の発見分析を楽しみにしています。

○熊本早苗先生の朗読の素晴らしさにとても感動いたしました。聴いた瞬間、率直に朗読のプロの方かと思いました。お声も読み方も、すべての点において、土地の匂い、空気、人々の表情までも感じられ、できることなら、熊本先生の朗読をずっとこのまま聴いていたい、という気持ちになりました。ありがとうございました。

○山崎憲治先生の、抽象的な表現ですが「立体感のある」ご報告を聞きながら、山口弥一郎氏の地理学者としての理念と志をもった人物像が浮かび上がり、場所ごとの自然特性を踏まえながら、人々の土地への愛着と生業の全体像を見定めようとする姿勢がご報告から感じられ、山口氏の視座とセンスにとても刺激を受けました。

吉村昭氏に関しては、田中成行先生の紹介部分から受けた印象ですが、実際の事件の現場に身を置き、人間の言動を年齢や性別や社会的立場の違いが混然と渦巻くただ中に作家の視線を注ぎ、人間の心の風景を読み込もうとする作家としての凄さや鋭さを感じました。

<今の課題>

○研究会の課題としては、明治・昭和・東日本大震災等の教訓を踏まえて「災害文化」という概念をモデル化すること。被災地の課題としては、過疎化をどうするかに尽きます。そこをどうに

かしなければ、復興は見通せません。2015年の人口を100としたとき、釜石市の2045年の人口指数は56.8です（国立社会保障人口問題研究所データより）

○大きな国のヴィジョンを持つことだと思います。国のヴィジョンと政策に、覚悟、熱い信念とブレない一貫性、それを乗せる言葉があると国民の心をまとめ、国のグランドヴィジョンが、地域の迅速な判断と行動につながり、国を形作ることでしょう。…「国民皆防災士」を提案します。幼稚園から大学院までの教育過程で、何らかの防災知識と技術を学び、伝える語学を学びます。2月7日、トルコ・シリア大地震直後に日本の救援隊が送り出されたように、海外の被災地域に、日本の地方都市の救助隊が出動することも増えるでしょう。日本は海外に武器兵隊は送らなくても、防災士を送る頼りになる国になり、安全保障の要になります。…高台に医療・教育・エネルギー資源施設・行政施設・遊園地・防災教育施設等々を置き、生活の地域コミュニティを維持、IT技術・造船業・海運・水運を発達させ、有事には海上から救援隊を送ります。すると、農業や漁業従事者に副業ができ、住み方・働き方が変わります。沿岸部の広域地は、非日常のための飛行場、運動場やお祭りなどの活動に利用。新しい職場が増え、特に沿岸部に越境移住者が増え、若者にはビジネスチャンスが生まれ、古老は若者を支える側になるという未来が展望できます。

○人類は群れ社会をつくって進化発展してきたと思います。群れ社会を作るベクトルと一見矛盾するように思えるのが、自由や個性や多様性。これらが互いに矛盾せず、寛容で、相互の信頼関係が保たれた群れ社会をつくる人間の特性が活かされた社会の構築の可能性に何らかの希望の光を見出せるか？

(討論の記録は略した。事後アンケートに討論のまとめとしての感想も多く、アンケートから一部抜粋した。)